



制度通
一

74
673
1



門 7
號 673
卷 1

東涯先生輯

制度通

全部

十三冊

施政堂藏板

制度通叙

儒者誦法聖人之道以倡當世。世之人謂儒者之道。上世之事。異方之習。而非我邦今日之宜也。而或者則謂中夏文明之地。



禮樂之所在。而本邦僻處夷
 服。簡陋無文。不足與言也。此西
 者胥失之矣。溯觀玄古之初。太
 素無文。太朴不斲。本邦與函
 夏一也。考諸西土。神聖繼作。而

人文日闡。建諸天地。徵諸庶民。
 著為典謨。訓誥。放為禮樂兵刑。
 以及乎周。立百王之大法。郁
 乎其文哉。秦任其私智。以滅先
 王之禮。自是以降。以革損益。因

時更制。雖非復三代之舊。而亦不能全蔑其法。而反乎所為焉。蓋自然之道也。稽之吾邦。天七地五之世。邈矣。自腆支質。我貢厥經典。因高之使。隋真人之聘。

唐而文籍之道興焉。律令格式。專遵唐制。而其宏綱大要。百世有賴。然則謂吾國全讓中夏可乎。謂吾國不必用中夏可乎。大抵西土之禮。固有古今之變。而

吾邦之制。亦有舊新之殊。經生
晚達。專狃聞三代之制。而謂秦
漢以還。亦如上世。不知封建革
而郡縣興。公侯伯子男替。而監
司守令立。貢助徹廢。而租庸調

分。農兵器罷。而府兵建。采地失。而
俸祿頒。墨劓刑宮室。而笞杖徒
流行。鄉舉里選革。而墨書帖括
盛。刀布壞。而為泉鈔。珠玉亡。而
為黃白。篆籀省。而為真。艸簡牘

便而為紙帛椅而不席騎而不
乘今之中夏非古之中夏也而
今閭閻委巷之人不唯不識中
夏之古今而詢之我邦之古亦
惘焉不省謂前世禮俗亦與今

日同吁亦笨矣吾邦治化之隆
庶績咸熙百事攸叙曆象之法
祖乎尚書紀元之禘肇乎漢史
都邑之制出于周禮大極之殿
始乎魏氏道國郡鄉之設準道

州縣鄉官省諸司之掌。倣三省
 部寺。凡厥禮樂兵刑之著。律度
 量衡之制。皆莫不有所由本焉。
 夫聖人之大經大法。或襲或革。
 傳至吾國。以逮今日。豈謂之異

方之宜。上世之事。可不務講究
 其所由焉。哉。亂不敏。不揣譎陋。
 通考三代以來。至宋明。典章文
 物。參之以。本朝之制。使讀書
 攷古者。知其所以由矣。名曰制度。

通為之序云

享保九年甲辰臘月日

伊藤長胤序



制度通目錄

- 一 卷一
- 一 元年改元ノ事
- 一 正朔三統ノ事
- 一 日星彙度ノ事
- 一 曆法ノ事
- 卷二
- 一 州縣郡國ノ事
- 一 郡縣大小等差ノ事

一 內朝外朝並二朝會ノ事

一 宮殿名稱ノ事

一 都邑坊城並二皇城宮城門號ノ事

卷三

一 三公三師三少ノ事

一 唐三省 本朝太政官ノ事

一 六官九寺六部八省ノ事

一 後宮官ノ事

一 東宮官屬ノ事

卷四

一 官秩位階正從ノ事

一 兼行守試ノ事

一 功臣號並二賜ノ事

一 官職四等四分ノ事

一 詔勅制誥並二位記等ノ事

一 冊授勅授等ノ事

卷五

一 服章ノ事

一 印章ノ事

一 俸祿ノ事

一 符牌勘合ノ事

一 僧尼度牒ノ事

卷六

一 進士及第狀元三場ノ事

一 考課ノ事

卷七

一 任子蔭補ノ事

一 廟制並ニ間架ノ事

一 九族五宗五服並ニ本朝五等親ノ事

一 廟號諡號並ニ臣下謚號ノ事

卷八

一 古今戸口多寡ノ事

一 墾田並ニ稅糧總數ノ事

一 田賦並ニ井田租庸調兩稅ノ事

卷九

一 田法步畝頃並ニ本朝町段ノ事

一 行程里數ノ事

一 成丁ノ事

一 復除並ニ蠲符ノ事

一 旌表ノ事

一 常平倉社倉並ニ本朝屯倉公廩田ノ事

卷十

一 錢貨ノ事

一 尺度ノ事

一 斗斛ノ事

一 權衡ノ事

一 端匹屯約ノ事

一 姓氏ノ事

一 名字ノ事

卷十一

一 釋奠ノ事

一 樂ノ事

一 經籍ノ事

一 學校ノ事

卷十二

一 律令格式ノ事

一 兵制並ニ 本朝軍團ノ事

卷十三

一 五刑ノ事

一 十惡並ニ 本朝八虐ノ事

一 八議並ニ 本朝六議ノ事

一 議請減贖官當除免ノ事

一 大赦常赦曲赦ノ事

一 私度越度冒度ノ事

一 保辜限ノ事

一 才技長上ノ事

一 士功並ニ長功中切短功ノ事

制度通目錄畢

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

制度通卷一

伊藤長胤 輯

▲元年改元ノ事

○古ハ天子諸侯即位ノ年是ヲ元年ト云唐
 虞ニ載ト云夏ニハ歳ト云殷ニ祀ト云周ヨリコノカ
 タハ年ト云元トハ天子ノ元ノゴトクハジメト云コ
 トナリ先君崩薨ノ後明年ヲ元年ト云踰年^テ改^ラ
 元ト云是ナリ

○秦已前年號ノコトナレ天子諸侯トモニ元年ヨリ
 二年三年ト數ヘテ年ニ隨フテ事ヲ紀ス書經
 洪範ニ惟十有ニ祀王訪于箕子トイヘリ史記
 秦ノ本紀ニ維皇帝二十六年トイヘリシカレトモ秦
 惠文王十四年ニ更ノテ元年トス年號ノ名ハ多
 ザレトモ年號ノ漸是ヨリ始レリソノチ漢ノ文帝ノ十
 七年ニ云新垣平候日再中以爲吉祥是ニヨリ
 テアラタメテ後元年トス天子ノ在位ノ中ニ元年
 ヲ改ムルコト是ニハジマリ景帝ノ時ニ中元年後元

年ト二度改メラル武帝即位ノトシ初テ年號ヲ建
 レテ建元々年トスコレ年號ノハジマリナリ
 ○胡氏ノ春秋傳ニオモヘラク古ハ元年ト稱シテ號
 ヲ建ルコトナシ歷世無窮而美名有盡豈記久明
 遠可行之法也ト聖人ノ意ニアラストイヘリ朱子
 語類コレヲ非トセラルコトナリ後世ヨリ興リテモ世
 ノ為人ノ為ニ宜シキコトハ取ルニシキニアラズ
 本朝之制即位祥瑞災變及革命則改
 元

○本朝 神武天皇元年辛酉ヲ紀セシヨリ己未三十七世 孝德天皇元年乙巳ノ年ヲ大化ト號セラル 本朝年號ノ始メナリ六年庚戌長州ヨリ白雉ヲ獻スルニヨリテ白雉ト改メラレ五年ニ畢ルソノ次 齊明天智ノ二帝ハ年號ヲ建ラズツク次 天武天皇ノ時ニ白鳳朱鳥ノ號アリ 持統天皇ノトキ又年號ナシ 文武天皇五年辛丑對馬金ヲ貢スルニ因テ三月甲午元ヲ建テ大寶ト云ユレヨリ以後歷代相續シテ即位並ニ祥瑞災

變ニ必改メラルナリ大抵中國ノ外古今相傳シテ年號ヲ建ル國ハ史傳ノ間カツテ見アタラズ南詔國安南國少々年號アレトモ數百年相續シテ年ヲ紀スコトナシ

○本朝ニ辛酉甲子ノ年必改元アリ是ヲ革命今革命ト云コノ年ニ改元アルコトハ中國ニコノ例ナシ本易ノ革卦ヨリ起ル詩緯推度以災ニ云戊午革運辛酉革命甲子革改革卦離下火戊午之象兌上金辛酉之象金火相克革道始成鼎卦次

別表通 卷一 三

革故甲子次辛酉一元之始王者改代之際
 會所謂鼎新之義又易緯云辛酉為革命甲
 子為革命令ト是ナリ又一部一元ト云コトアリテ六
 甲六十年ヲ一元トス壬戌ニハシリテ辛酉ニオハル是
 ヲ二十一年ハセタルヲ一部ト云部ハ辛酉ニハシリ
 テ庚申ニオハルコノ一部一元トイフコト後漢書ニス
 ル部元トイフト同シカラズ

○神武天皇ノ元年辛酉ヨリ 齊明天皇六年
 庚申ニテ千二百二十年コレヲ一部トス同天皇

二年壬戌ヨリ 推古天皇九年辛酉ニテ千二
 百六十年是ヲ廿一元トスコノ年数同カラザルワ
 ケハ部首辛酉ノ年ヨリ一元六十年ヲ除テコレ
 ヲ算フルナリコレニヨリテ辛酉ノ年改元アリソノ詳
 ナルコト八一條禪閣三革説ニ三善清行易説等ヲ
 引キ漢ノ鄭玄唐ノ開元中王肇カ説ナトニヨリテ
 ノ説ヲ詳ニセラル

○宋元以來改元コト漢唐ノ制ニヨリテカハルコトナシ
 ○明ノ太祖ニイタリテ改メテ一帝一號ニキハメラル

中コロ二年、號ヲ改ムルコトナシ、謝在杭五雜俎云
 我國家列聖相承、惟於即位之踰年、改元、終
 身不易、亦可謂卓越千古矣、ト今清朝モソ、通
 リニテ第一世順治、第二世康熙、今第三世雍
 正ト云ト、書籍イマタ傳ラザレハ、詳ナルコトハ、レリカシ

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

▲正朔三統ノ事

○唐虞ノ時、正朔ノコト詳ナラズ、夏六寅ノ月ヲ正トシ
 殷六丑ノ月ヲ正トシ、周ノ世ニハ子ノ月ヲ正トス、是
 ラ三正ト云、又三統ト云、是ハ北斗七星、北極ノ一、分
 七十二度ノ中ヲメグリテ、地中ニヘルコトナシ、一晝
 夜ノ間ニ斗柄十二方ヲ一ハリサスナリ、天ノ運行、每
 日一度ツ、ナルヨリテ、一日一日ニ少シツ、ウツリテ、年
 三百六十五日、餘ニテハモトノ處ニカヘルシカルニヨリ
 テ、十二ヶ月ニ十二方ヘウツル、毎月初昏ニオサスト

コロノ方ヲ以テツノ月ノエト、スタトハ今ノ正月十六
 初昏ニ寅ノ方ヘサス十二月十六日ノ方ヘサシ十一月
 十六子ノ方ヘサス餘ノ九月三十同シ是ヲ以テ十二
 時ヲ定メ十一月ヲ分ツ是子丑寅三正ノヨリテオ
 コルケナリ是ヲ三統ト云コトハ後漢馬融ノ論語
 ノ註ニ出ツ所損益謂文質三統ト云リ正義ニ書傳
 略説ヲ引テ天有三統物有三變トイヘリ子ヲ天
 統トシ母ヲ地統トシ寅ヲ人統トス故ニ是ヲ三統ト
 云統者本也謂天地人之本トツノワケ正義ニ詳ナリ

○三統ノ説註疏ハ集註ト同シカラス註疏ノ説ハ子
 ノ月天ノ陽氣ハシメテ動クヲ以テ天統トス母ノ
 月ハ萬物地中ニアリテ萌芽ヲ含ミ養フヲ以
 テ地統トス寅ノ月ハ人物地ニアラハレテ人切ノ修
 理ヲマツヲ以テ人統トストイヘリ集註ニ邵康節
 ノ一云ヲナシニ會ニワリテ天關於子地關於丑
 人生於寅ト云説ヲ取用ヒラレシカレトモ古ヘソノ
 説ナキユトナレハヨリ信スヘカラスコレ等ノ説レイテ
 ソノ説ヲモトムヘカラス

三代建正圖

夏正	建寅 今正月	人統	又曰 人正
殷正	建丑 今十二月	地統	又曰 地正
周正	建子 今十一月	天統	又曰 天正

○六、經ノ内周ノ書所ニヨリテ夏正ヲ以テイフコトアリ古来ヨリ諸説サ、クアリテ一決セ宋ノ魏了翁ノ正朔考明ノ張以寧ノ春王正月考ナト論辨ア、タナリ周正ヲ主トスル人ハ詩書春秋トモ何レ

モ周正ニテ月ヲシルストイヘリ夏正ヲ主トスル人ハ何レモ夏正ニテシルストイヘリ詳ニ經傳ノ間ヲ考ヘ合スルニ當時ニ兩方トモニ通シテ用ヒタルトニヘタリ何ツナレハ春秋左傳ノ内ニ春王正月日南至トイフコトナリ今ノ十一月ナリソノ外春無冰夏無麥禾トイフカコトキ周正ヨリイハ災異ナリ今ノ正ニテイハサニ災トモイハレシカレハ春秋ノ一經ハ子ノ月ヲ以テ正月トスルコトニガヒナレ又詩經ノ内ニ四月維夏六月徂暑トイフカコトキハ夏ノ正ニテイハハ相應シ周ノ正ニテイハ

ハカナズ是両方トモソノ證據アキラカナリカヤウニニ
 正アルワケハイカニトイハ古ヘヨリコノカタ夏正事ニ
 便ナルニヨリテ世々ニ改正アレトモ民間ニハ夏正ヤリ通
 用ストニヘタリ春秋ハ魯ノ史記ナルユヘニ公儀ゴトニハ
 時王ノ制ヲ用ヒタルナリ詩ハ民間ノ諷謠ナハイヒ付
 テ勝手ニ宜シキヲ用ユトニヘタリ元文類ノ内張敷言
 改月數議アリ考フヘシタトハ今時文字ニ里數ヲ
 シルスニ當時ノ三十六町一里ニテ記ス人モアリ又唐ノ
 里數 本朝古ヘ六町一里ニテ記ス人モアリ今ノ

人ハヨ三分テマガフコトナシ後世ニナリテハ疑フコトアルヘシ
 二正ノワケモコノヤウ成ルコトニヘタリ兎角孔子顔
 子ニ告ケ行夏之時トクニフシカレハ夏殷周トモ各
 正月カハリテソノ内ニテハ夏ノ正天時ノ正ヲウルコトシ
 ルヘシ

三代以前ノ正朔ノコト鄭玄オモヘラク帝王易
 代莫不改正堯正建丑舜正建子ト王肅オ
 モヘラク惟殷周改正易民視聽自夏已上
 皆以建寅為正ト書經舜典ノ疏ニ詳ナリ然

トモニ説トモ何ニヨルコトヲシラズ其内王肅ノ説
近カルヘシ

○周亡テ秦ニイタリ始皇ノ時ニ正朔ヲ改メテ今ノ
冬十月亥ノ月ヲ以テ正トス漢ノ世モハジメハツノ法ヲ
承テ十月ヲ正トス史記漢書ニモ漢ノ始メ高帝文
景ニテハ毎年ノ首ニ冬十月トシルス武帝ノ太初元
年ニイタリテ兒寛ノ議ニシタガヒ改メテ夏正ヲ用
ユ本紀ニ云夏五月正歴以正月為歲首トユヨリ
ノ千後世ニイタルマテモハラ夏正ニ從フテ遂ニ改ムコト

ナレ夫子行夏之時トタラフ萬世マコトニ違フコトナ
シ唐宋元明ニ至ルニテミナ同キコトナリ

本朝之制用夏正

○本朝國史ニ記スル年月ミナ寅ノ月ヲ正トス上世ノ
事後世トコトニ詳ニシカタレ因テ思フニ上世ヨリ記
録シ来ルコト年久シク後世中國ヨリ曆法ワタリタ
ル上長曆ヲ以テ推テ夏正ヲ以テ前代ノコトヲ記
サルト見ヘタリ

一、度ト云コトハ天ヲ三百六十五四分一ニワリ分内
 ノ一ツヲ一、度ト云モト天ト日月ト毎日ノクイチカヒ
 ヲ一、度ト云テ縦横トモニ是ヲノリニシテ北極地ヲ
 サレノ高下並ニ二十八宿領分ノ廣狹ヲモツモルコト
 ナリサテ天ト云モノハ蒼々ノ體ニテ運行ノ度ニルスヘ
 キニヨレナシ星ヲ以テ體トス然トモ曆書モクノ事ヲ
 明ニ説破セザレニヨリテ初學ノ士ニトフコト多シ先
 今日ノ初昏ニ南方ニ一箇ノ中星ヲ見付テ明

▲日星躔度ノ事

一、度ト云コトハ天ヲ三百六十五四分一ニワリ分内
 ノ一ツヲ一、度ト云モト天ト日月ト毎日ノクイチカヒ
 ヲ一、度ト云テ縦横トモニ是ヲノリニシテ北極地ヲ
 サレノ高下並ニ二十八宿領分ノ廣狹ヲモツモルコト
 ナリサテ天ト云モノハ蒼々ノ體ニテ運行ノ度ニルスヘ
 キニヨレナシ星ヲ以テ體トス然トモ曆書モクノ事ヲ
 明ニ説破セザレニヨリテ初學ノ士ニトフコト多シ先
 今日ノ初昏ニ南方ニ一箇ノ中星ヲ見付テ明

日ノ初昏ニコレヲ見ル今日月所ヨリハウクヌガレ其
 ホドノ間ヲ一度トタテ何尺何丈ト云フツモリニア
 ラス毎日毎日カクノ如ク三日ニ一度ツ、スヤリテ是ヲ
 三百六十五ノ上又一日ヲ四分ニワリタル内ノ一分
 ホトニナルトキニ今日見付タル所ニカヘル冬至ヨリ冬
 至ニテ夏至ヨリ夏至ニテ何モカクノ如シ是ニヨリテ
 天ヲツモリテ三百六十五度四分一ト云朱子曰
 天ヲ旋於地外一晝夜一周匝自地之正午
 而觀之則其周匝之處第一日子時至第二

日子時微有爭差蓋周匝而過之觀天者定
 其濶狹名曰一度ト是ナリ

○天象ノ上ニ運行ノ別ハアリ天一通りナリ二十宿等
 アフニ滿天ノ徑星皆一同ニ天ニ隨テ左旋ス日一通
 リナリ月一通リナリ五星各自ニ五通りナリ是ヲ合
 セテハツ書任舜典ニ在瓊璣玉衡以齊七政ト云
 リ日月五星ヲ七政ト云天ヲノリニシテ是ヲ除キテ
 是ヲ七政ト云是曆法ノオコユエシヤリ

○天ノ運行ハ冬至ヨリ冬至ニテ三百六十五日四

分日ノ一アリ故ニ三百六十五日餘ヲ全歲ト云尚
書二期三百六旬有六日ト云是ナリ滿天ノ星辰
五星ヲノヅク外何レモカクノ如クニ運行スサテ日
體ハ毎日周天ヲメグリテモトノ處ヘカヘル少ノ過不
及ナレ天行ノ度ニヤハセテハ毎日一度ヅ、オクルナリ
是ヲ日行、一度ト云月體ハ毎日周天ヲ運行シテ十
三度十九分ノ七ツ、オクルナリ是ヲ月行、十三
度十九分ノ七ト云今ノ入大畧ニウモリテ月ノ出ハ
毎夜ニ一時ヲ十分ニワリタル四分ツ、遲速アリト

云ホトノコトナリシカレハ天モ日月モ遲速アレトモ何レモ
東ヨリ西ニメタリ毎日ニ一周天シテ日ハ天ヨリ一度
オツク月ハ十三度餘リオツキナリシカルニ天ハ左旋
シ日月ハ右旋シテ日ハ一度行キ月ハ十三度ユクト
云ハ曆法ノ積リヤスキニヨリテカク云コトナリ左旋ト
云ハ東ヨリ西へ行コト右旋ト云ハ西ヨリ東へ行コト天
モ日月モトモニ實ハ左旋ナリ蟻磨ノタトヘ並ニ兩
舟並ヒ行クニ遲キ舟モ同キヤウニ行ケトモ早キ舟
ヨリ見ハアトヘ行カコトシト云タトヘナト何レモツ事

古朱子曰曆家以日之不及天而退一度者
為右行一度蓋以截法取其易算耳月亦左
行ト是ナリ或云天ハ實ニ左行シ日月ハ實ニ右行
シテ算法ニテ言タルニアラズト予謂以毎日而言
則天與日月俱是左旋以一年而言則天左
旋而日月右旋ト故ニ古來云々ス

○堯ノ時ニ冬至ノ時日二十八宿虛星ノ七度ニ在
リ故ニ堯典ニ日短星昴以正仲冬ト云リ夕ノ中
星昴十六日虛ニアタルナリ

○圖書編云堯之冬至初昏昴中而日在虛七
度虛者北方之宿則日行北陸躔于玄枵之
子也今之冬至初昏室中而日在箕三度箕
者東方之宿則日行東陸躔于析木之寅也
是去堯末四千年而差五十度矣

○其後千九百年餘ニテ周ノ末秦ノ時分ニナリテ
ハ斗ノ二十二度ニ在リ月令云仲冬之月日在
斗ト是ナリ其後世々ニ差アリ之ヲ下ニ舉ク

堯ノ時 日在虛七度 書經堯典ニヨリ

周ノ末 日在斗二十二度 月令ニ據

テユリヲ推ス漢書律歷志云冬至之

時日在牽牛初度上爾雅既具其

漢元和三年 日在斗二十一度 博物

典彙ニ見ル

晉大元九年 日在斗十七度 同前

劉宋元嘉十年 日在斗十四度 同前

唐開元十二年 日在斗九度半 同前

宋沈存中筆談時日在斗六度

宋慶曆甲申日在斗五度 文獻通考

宋高宗改統元曆時日在斗二度 博

物典彙ニ見ル

元ノ初六日在斗初度 理學類編ニ見ル

元改授時曆時日在箕十一度 博

物典彙ニ見ル

元至元ノ比 日在箕九度 理學類編ニ見ル

元延祐ノ比 日在箕八度 同前

明嘉靖間冬至初昏室中 日在箕二度

博物彙編見之

堯ノ甲辰ヨリ明嘉靖ノ比ニテハ三千九百年
アリ日ノ在リトコロノ千カヒ五十餘度ニ及
ヘリ典彙類編等ニヨリテコレヲ録ス

○漢書律歷志ヲ考ルニ武帝ノ元封七年十一月
冬至日月在建星ト建星トハ二十八宿ノ斗星
ナリ注ニ舊法ニ斗二十一度ニ在太初曆白分
法ニ斗二十三度ニアリト云フ後留ノ大元九

年ニ斗ノ十七度ニ在リ劉宗ノ元嘉十年ニハ
斗ノ十四度ニ在リ唐ノ開元十二年ニ斗ノ九
度半ニ在リ右イツレモ博物彙編ニノス宋ノ仁宗
ノ慶曆甲申ノ年ニ斗ノ五度ニ在リ通考ニ
レヲノス高宗ノ世統元曆ヲ作ルトキ斗ノ二度ニ
在リ元ノ初ニ斗ノ初度ニ在リ授時曆ヲ作ル
トキ斗ノ十一度ニ在リ至元ノ比斗ノ九度ニ
在リ延祐ノ比ニ斗ノ八度ニ在リ明ノ嘉靖ノ比ニ
斗ノ八度ニ在リ初昏ニ室星中ニ日斗ノ二度ニ在リ右

何レモ類編典彙ニ具サナリ

○書經蔡氏傳云天度常平運而舒日行常内轉而縮天漸差而西歲漸差而東此歲差之由理學類編云天度有餘日道不足故六十餘年之後冬至所直天度率差一度是謂歲差ト是六日ト天ト打合セテ閏月ヲ立テ平均ニシモ七十餘年ヲ経テ天ノ歩ハ早クシテ西ヘキ日ノ在ルハ一度オソキナリソレユヘ竟ノ時ノ冬至六日虛星ノ度ノ内ニテリテ往來ニ後世ニテ段々カリアルト上ニ樂通考

○文獻通考ニ中興天文志ヲ引テ曰江默謂歲差者日躔於一歲之間行周天度未及餘分而日已至焉故每歲常有不及之分然歲差古無有其法漢洛下閎雖知太初曆ハ百年當差一度後人未究其悉也晉虞喜始覺之トノ說書經蔡氏ノ傳ト同カラズ蔡氏ノ說ノ通十六天ハ早クシテ日ハ遲レソレユヘ數十年ノ後ニハ天ハ日ヨリ西ヘ一度ホトスクルナリ中興志ノ說ノ通十六天行ノ盡餘分ニオヨハサル内ニ日ノアレハヤクシテワノ

所ニイタルシカレハ數十年、後六日天ヨリ西ハ一度ホト
 スグルナリコノニ、説ウラハラノ違アリシカルニ堯ノ時ニ六日
 虚星ノ綫度ニアリテ宋元ノ時ニ六箕斗ノ分ニアリ中
 興志ノ説長セルニ似タリ何トナレハ二十ハ宿ハ人位ヨ
 リ見ハ南ニアタリテ角ヲカシラニシテ西ヨリ東ニシテ
 レリ半ハ地下ニ入ルツノ運行毎日東ヨリ西ニシタル堯
 ノ時日虚星ニアリテ宋ノ時斗ノ綫度ニアルトキハ虚
 ハ斗ヨリ東ノ星ナリシカレハ星ハオクテ東ニ日ハ行キ
 過テ西スト見ヘタリ蔡氏所謂天漸差而西歲漸

差而東トイフコトハアヤマリト見ヘタリ
 ○北極地ヲ出ルコト三十六度南極地ニ入ルコト又三
 十六度今ノ渾天儀天球圖等ニウツストコロカク
 コトシ是ハ中國ノ嵩高山ヲ天地ノ中トシテ積リタ
 ルモノナリコノ度数所ニヨリテ同シカラス南ヘヨルホト卑
 ク北ヘヨルホト高シ明ノ成祖韃靼ヲ攻テ深ク北胡
 ノ地ヘ入りタルハ北極四十度ニ及ブトイヘリ又元ノ
 陳孚字剛中トイフモノ廣南ヘ使シテ極星ノ高
 サワツカ十五度ニオヨブトイヘリ博物典彙云南海

極出地^ラ一十五度北、海極出地^ラ六十五度、
 唐開元十二年僧一行南北極ノ高サ並ニ冬至
 夏至ノ日影ヲ測ル一時ニ之ヲ校ス林邑國ハ北極
 高十七度安南都護府ハ二十一度六分此ハ何レモ
 南ハツレナリ蔚州横野軍ハ北極高四十度此ハ北
 ハツレナリソノ詳オクハ通典秘書監ノ下ニセリ

天ノノグリハ北高ク南卑ク東ヨリ西ニ轉ス朱子曰
 天轉也非東而西也非循環磨轉却是側轉
 トシカレニヨリテ南北ノメクラザル所ヲ南極北極ト

云天ノ軸ナリ南極ハ常ニ地下ニカクレテ見ヘズ北極
 地上ニアラハレ目ジレシナケレハカナハサルニヨリテウノ傍
 ノ星ヲ目當ニシテ是ヲ北極星ト云又紐星トモ云
 北辰トモ云子ノホレノコトナリウクウゴキハマレトモ極
 ニチカキニヨリテメグルコトスクナレ所謂北辰居其所
 而衆星共之ト是ナリ辰ハモト星ノコトニアラズ天壤
 也ト訓ジテ星ノヤドリノコトナリ然トモ又通シテ星ヲ
 スグニ北辰トモ云ナリ北極星ヲスグニ北極ト云ト同シ
 キコトナリ

○北斗ノコトハ前正朔考ノ下ニ舉ル通リナリ重テテ
 ルスニ及ハズソノ内斗柄正月初昏ニ寅ノ方ヲサスニヨ
 テ是ヲ寅ノ月ト云ニ月ハ卯ノ方ヲサレ三月ハ辰ノ方
 ヲサレトニケ月ニナ此ニ準ス三代己東傳ニトヨク
 ノ如レシカルニ今破軍星ヲクル六時四ツサリテ月ノ數
 ト云ツタフシカレハ正月ニ斗柄ノ方ヲサレテ寅ニオ
 ザズ或人コノ説ヲ執レテ正月ヲ寅ノ正トイフコトハ
 ヤリトイヘリサダメテ天象ノ上ニテ方角ノ取ヤウ
 タカヒテノコトナルヘレニ正ノ説古來ヨリ推歩スルコト

六誤トアルニシト答ヘ侍リキコノ比宋沈括存中
 カ夢溪筆談ヲミルニ云古者正月斗柄建寅今
 則正月建丑矣又歲與歲合今斗差一辰竟
 與日短星昂今乃日短星東壁此皆隨歲
 差移也ト是ニテサキノ疑判然タリ是モ歲差ノ
 ワケニテ唐虞ヨリコノカタニ千年餘ヲ過ルニヨリ
 テ斗柄モ一辰ヲ違フナリ軍家ノ説ハスグニ今ノ
 世ノ天象ニ就テ覺ヘタルモノニテ是モアヤリニアラ
 ズニ説各リノ時ニヨリテカク異ナリ「際ニスヘカラス

○二十、ハ宿ノメグリ衆星トカハルコトナシ天體ノ内ニテ
 人、位ノ南方ニアタリテ二十、ハ座ノ星ヲ目アテニ
 サダメタルモノナリコレヲ四方ニ分ケテ東方蒼龍ノ七
 宿南方朱雀ノ七宿トイフコトハ人、位ノ四方ニアラ
 ズ二十、ハ宿ヲ四ツニワリテ七宿ツ、ヲ四方ニ配シテコ
 ラ東方南方ト云ナリ星ノアリ所時ニヨリテ東ニ在
 リ西ニモ在リソレニカニハズ角亢氐房心尾箕ノ七星
 イツニテモ是ヲ東方ノ七宿ト云人、位ノ東ニアラス東
 西北モホコレニ準ズ（以下文字は不明）

○蒼龍朱雀白虎玄武ヲ四神相應ト云テ四方ニ
 カクノゴトキ鬼神ノ象アリトオモフハアヤナリナリ本
 ニ、十八、宿ノ星象ヨリオコル王者ハ天ニ體シテ行
 ニヨリテ旗常ニヨリ紋ヲ繪カキテ四方ノ星象ニカ
 ドル角亢氐房心尾箕ノ七宿ツノ並ヒヤウ龍ノ如
 シニキ牛女虚危室壁ノ七宿ツノ並ヒヤウ蛇ノ龜ヲト
 子如シ奎婁胃昂畢觜參ノ七宿ツノ並ヒヤウ虎ノ形
 ノ如シ井鬼柳星張翼軫ノ七宿ツノ並ヒヤウ短
 尾ノ鳥ノコトシ是ヲ四方ノ色ニ配シテ又蒼龍朱

崔白虎云武ト云ナリソノ詳ナルコトハ爾雅釋天ノ疏ニアリ云四方皆有七宿各成一形東方成龍形西方成虎形皆南首而北尾南方成鳥形北方成龜形皆西首而東尾

○五星木火土金水ノ五星ナリ又是ヲ五緯ト云経緯ノ義ナリ二十八宿並ニ滿天ノ衆星ハイツレモ一帯同クメグル是ヲ経星ト云五星ハ他ノ星ニカハズ各自ニ別ニ運行ス故ニ是ヲ緯星ト云経緯トイヘトモ實ニタテヨコニメグルニアラズ同ク東ヨリ西ヘユケトモノ

メグリヤウ同シカラザルヨリキ経星緯星ト云ツナリソノ内ニ日月五星ニハ小輪ト云コトアリ

圖	星	五
辰星	太白	鎮星
水星	金星	土星
		火星
		木星
		歲星

▲ 曆法ノ事

○ 事物紀原ヲ考フルニ通曆物理論等ヲ引テ大昊
 神農黃帝ナドノ時ニジメテ曆ヲ作ラルトイヘリ又
 呂氏春秋ニ古く容成ト云人曆ヲ作ルトイヘリ世
 本ニ是ハ黃帝ノ時ノ人トイヘリ今書經ヲ考フルニ
 堯舜ノ時初テ羲和ニ命シテ天文ヲ考ヘ曆法ヲ
 ハジメラル是固ニ書ニアラハレテタシカナルレシナリシカレ
 トモフノ推歩ノ法ハナハダ精詳ナルコト中々百年ニ
 百年ニテ考ヘイダシタルコトハミヘズ堯舜ヨリ以前

幾千百年ヲ経テ幾バタ人ノ思慮推算ヲ以テ
カクノコトク考ヘ究メタルモノナルベシタ、堯舜ノ時ニ
イタリテソノ法ニヨリテイヨククハシク明カニナリタ
コト、ミヘタリ夫子祖述堯舜憲章文武レタマフタ
ハコレヲ以テハジメトシテ可ナリ

○漢書律歷志ヲ按スルニ古ハ顓頊ノ時ニ南正重司
天北正黎司地テ曆數ノ事ヲ掌ルソノ後重黎
ノ二官トモニスタレテ閏月タシカラズ堯ノ時ニ重
黎ノ子孫ヲ舉用ヒラレ曆ヲ正サシム是ヲ義和ト云ト

ツノ事書經堯典ニ詳ナリ

○春秋左氏傳ノ内處々ニ曆ノコトアリ或ハ曰司歷過
也ト然トモソノ詳ナルコトハミヘズソノ後秦ノ世ニ志ニテ
曆法ヲ改テラレコト史傳ニ見ハレズ漢ノ時ニ黃帝
顓頊夏殷周魯ノ六曆存在スルコト漢志ニテラハル
是ハ後世ヨリ古書ノ年月ニヨリテ推歩シタルモノナ
ルヘシ、カレドモ古ヘヨリモ世々ニヨリテ改メ正サレハカナハ
サルコトナレハ世々ノ曆法コトナルハズナリ

○漢ノ武帝ノ太初元年ニ公孫卿司馬遷等曆

法壞廢ノ由ヲ申スニヨリテ御史大夫兒寬ニ詔シテ曆法ヲ議セシムヨリテ夏正ヲ用ヒ年號ヲ改メテ太初元年ト云太初曆ヲ作ル曆ニ名ヲ付ラレトハヨシハシムツノ後三十六年ニシテ成帝ノ元鳳六年ニ劉歆ニ統曆ヲ作ル平帝ノ時ニ四分曆ヲ作ル靈帝ノ時ニ乾象曆ヲ作ル漢ノ曆法スベテ四たび改メラレ

漢	太初曆	武帝
曆	三統曆	成帝
四	四分曆	平帝

變圖

乾象曆 靈帝

○曆ニ歲差ト云コトアリ是ハ日月星辰ノ運行遲速ノリ各同シカラズコレヲ打合セテ一年ヲ大小十二月ニシテ二十四氣ニワリニ歲ニ一閏五歲ニ再閏ヲオク十九年七閏ニテソノ出入ナク一同ニナル是ラ一「章トイフレカ」ドモ少クツノ夕ガヒハニ又カレズワレユヘ數年ノ後ニハ曆ニクイチガイアリテ日ノ在所オナジカラズ是ヲ歲差ト云東晉ノ唐喜ヨリ是ヲ算シ出

○一 度ヲ差フトイヘリ 隋ノ劉焯西家ノ中ヲ取テ
 ニテ一 度ヲ差フトイヘリ 唐ノ一行三家ノ
 七十五年ニテ一 度ヲ差フトイヘリ 又三才圖會
 說ヲ考ヘテ劉焯カ說ヲ近シトイヘリ 大衍曆ヲ以テ
 オシテ八十二年ニテ一 度ヲ差フトイヘリ 又三才圖會
 ヲ按スルニ郭守敬ハ六十六年ニテ一 度ヲ差フト
 イヘリ

○二 國魏ノ世ヨリ隋ノ時マテ曆法凡十三度改メ
 ラル唐ノ一代ハ度改メラズ

唐 曆 八 變 圖

戊寅元曆	高祖時道士傅仁均造
麟德甲子元曆	高宗時李淳風造
開元大衍曆	玄宗時僧一行造
至德曆	肅宗
寶應五紀曆	代宗
建中正元曆	德宗
元和觀象曆	憲宗
長慶宣明曆	穆宗
景福崇元曆	昭宗

○唐書曆志ニ云唐終始二百九十餘年而曆八改トツノ後五代五十三年ノ間晉周並ニ蜀南唐ニモ各曆法ヲ改メラルルテハ家アリ事イタツカワシケレハアケズ

唐書志ニ至德曆ヲノセズ故ニハ改ト云治平略ニ肅宗ノ時山人韓顯カ言ヲ用ヒテ曆ヲ更メテ至德曆トストイヘリ

本朝之制 日本紀ヲ按ズ推古天皇十年冬

十月百濟國ノ僧觀勒來朝シテ曆本ヲ貢ス並

ニ天文地理遁甲方術ノ書ヲ持シ來ル仍テ書生三四人ヲ選テ學習セシム陽胡史祖玉陳曆法ヲ習フ此本朝曆法ノ始リナリ三代實錄ニモ又觀勒始テ貢曆術而未行於世トコレヲ引ケリ

○天武天皇四年正月庚戌始興占星臺ト云々

○ソノ後 持統天皇四年十一月甲申奉勅

始行元嘉曆典儀鳳曆三代實錄ニ云 持統天皇四年始用元嘉曆次用儀鳳曆 稱德天皇天平寔字七年八月停儀鳳曆用開元

大衍曆 光仁天皇嘗龜十一年ニ至テ遣唐使録事内藥正羽栗臣翼^{ツシム}宣應五紀曆經ヲ貢ス明年天應元年ニ勅アリテ曆ヲ造ラシム人ノ習學スルナク猶大衍曆ヲ用ユコト百年ニ及ブトイハリ

○文德天皇齊衡三年真野麻呂五紀曆ヲ用ニテ奏シ請フニ因リテ朝議アリテ大衍五紀西法カ子用ヒラル天安元年正月始用五紀曆先是曆博士大春日朝臣真野麻呂上奏本朝用開元大衍曆年久矣今檢大唐開成四年大中三

年兩年曆註月大小頗有差謬覆審其由蓋依五紀曆經所造請依件經術造進至是許之真野麻呂曆術獨步能傳祖業已及五世云 清和天皇貞觀元年ニ渤海國ノ大使馬孝慎新ニ長慶宣明曆ヲ貢ス三年六月曆博士大春日朝臣真野麻呂ノ奏ニヨリテ宣明曆ヲ用ヒラル右共ニ國史ニ詳ナリ

○後朱雀院長曆三年五月廿三日諸卿定申曆博士道平興僧證昭曆論事可用道平曆

之由被宣下之ト云々百練鈔ニ見ル

○後冷泉院永承五年九月廿八日諸卿定申
曆博士道平大法師證照兼博士為長等勅
申朔旦專道平ノ曆法朔旦冬至ニ定メタリト三
夕リ增命申云今年閏在十一月道平造曆可
謂紕繆ト時ニ大宋曆持來閏果在十一月道
平申云延曆以後一章不誤至于承平六年
者曆家之失也先例雖有和漢曆之相違公
家更不用異朝說云々仍被定朔旦畢ト又百

練鈔ニ見ル

本朝曆法五改圖

- 元嘉曆
- 儀鳳曆
- 大衍曆
- 長慶宣明曆
- 貞享曆

○本朝長慶宣明曆ヲ用ヒラルコト八百餘年ナリ

○宋時太祖ヨリ理宗ニテ曆法凡テ十六度改メ玉海ニ詳ナリ

宋 曆 十 六 變 圖

應天曆	太祖	乾元曆	太宗
儀天曆	真宗	崇天曆	仁宗
明天曆	英宗	奉元曆	神宗
觀天曆	哲宗	占天曆	徽宗
紀元曆	徽宗	統元曆	高宗
乾道曆	孝宗	淳熙曆	孝宗
會元曆	光宗	統天曆	寧宗
開禧曆	寧宗	會天曆	理宗

右黃帝曆ヨリ會天曆ニテ凡テ五十餘家ソ

次策王應麟カ玉海並ニ事言要玄ニ具サナリ

○元ノ世祖至元十三年ニ宋ヲ平ゲテ許衡王恂
 郭守敬ニ詔シテ新曆ヲ作ラシム南北ノ日官ト出
 來ノ曆法ヲ參考シ日月星辰ノ運行ヲハカリ中
 數ヲ酌取テ曆本トス十七年ニ至リテ成就スツ名
 ヲ授時曆ト賜フ書經堯典ノ敬授民時ト云ノ語
 シトリテ名ツケタルナリ 繼テ李謙ニ詔シテ曆議ヲ
 作ラシムツノ法前代ニスグレテ最精密ナリ丘瓊山

曰古今曆法至於元郭守敬可謂度越千古矣

元曆圖

授時曆

○郭守敬モトモ曆法ニ精シツノカニ改曆ノコト專守敬カ命ヲ受ク守敬奏シテオモヘラウ古々ノ曆ノ中ニテ唐ノ一行カ大衍曆ヲ稱首トス是ハソノカニ開元ノ時分南宮説トイフモノヲ遣シ天下ヲ巡行シテ景ヲ測ル

ニヨリテナリトイヘリ又渾天儀玲瓏儀景符等ニテザノ器ヲ作ルコニオイテ監候官十四人ヲ遣シ東ハ高麗西ハ滇池南ハ朱崖北ハ鐵勒ニイタルニテ元テ二十七所ニテ景ヲ測リ五年ニシテ曆成ルコノ次第廣治平畧ニアラハル

○古代ヨリノ曆法ハ上古ニ曆元トイフコトヲ立テテヨリ積リ出スコトナリ授時曆ノ法ハ夏至冬至遠近ノ日晷ヲ以テソノ中ヲ酌テコレヲ用ユ至元辛巳ノトシ前冬至ノ日時分秒ヲ以テ氣應トシ冬至距朔ノ日

ヲ以テ閏應トシテ歷代所謂積年ノ法盡ク廃ス
又日ヲ以テ百分トシ分ヲ百分トシテ歷代ノ日
法トイフモノ盡クスル此等ノワケ又廣治平畧ニ云
○明ノ太祖吳ノ元年ニ括蒼劉基ガ名ヲキテ聘
シテ都ニイタラシメ太史令トスソノ属官ヲ率ヒテ戊
申大統曆ヲ作ル洪武十七年ニ欽天監觀星臺
ヲ雞鳴山ニキツク是歲博士元統曆法ヲ改洪武
甲子ヲ曆元トセント請フ監丞李德芳コレヲ争フコ
コニ於テ太祖詔シテ洪武甲子ヲ以テ曆元トシテ授

時曆ノ法ニヨリテ推算スルコトハシメノゴトシヨリ先ニ
又回々曆ノ法ヲ用ヒラル三十年ニ回々監ヲ改メ罷
ラルワノ後正統中ニ己巳曆ヲ作りテ頒行セラル
ノ法疎ナルニヨリテ廢シテ己巳嘉靖中ニ光祿少
卿管監事華湘萬曆ノ初鄭世子載堉上書シテ
曆ヲ改メント請フ用ヒラレズ明ノ世ヲ終ルニテ改曆ノ
コトキコヘズ今ノ清朝ノ曆ハ時憲曆トイフト傳フ近
キコトナレハソノ詳ナルコトヲシラズ

明 戊申大統曆 洪武

全
冊
第
三
十
四
冊
年

計
十
冊
三
十
四
冊

制
度
通
卷
一

曆二變圖

己巳曆

正統

制
度
通
卷
一
畢

[Faint vertical text, likely bleed-through from the reverse side of the page]

